



# 人間の感情と生産性、牛と人間との関係はどうあるべきか

ちょっと聞いて!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

以前このコラムにて、グループとして飼養される牛群では序列によって社会的な階層構造が形成されることを紹介しました。しかし実際の酪農場では、牛群は人間により管理されるため、その社会は人間と牛とが混在する『共同体』と言えます。そこでは人間が牛群のリーダーになることを求められるも、決して力と脅しで優位に立つてはならず、人間が管理誘導していることを牛には気づかれず、かつ支配下に治めることが必要と言われます。



酪農における生産成績向上の要として、最近では特にカウ・コンフォートの重要性が語られ、私たちは牛舎環境を整備することで牛の快適性を高めようと努力しています。しかしウイリアム・マイナー研究所のグラント博士は、担当する情報誌の中で「カウ・コンフォートの基本が牛と人間の相互関係の上に成り立つことは意外に認識されておらず、牛群の中で両者の関係についての維持するかについて考える機会は少ないのではないかと指摘しています。そして搾乳中に牛を優しく扱う場合と粗雑に使う場合とでは乳量に十三%もの差が生じた事例や、搾乳中に怒鳴り声を上げると乳量が約四%低下した報告を紹介し、乳牛に対する人間の扱いや感情が乳生産に大きく影響することを主張しています。

これと並行し、近年は酪農における人間の性格と牛の生産性との関連性の研究も進められています。「牛の管理においては、愛情や誠実性といった人間が持つ性格が強く作用する」と報告したイギリスの研究では、人間が牛の気持ちを理解すること、労働への充実感を持つこと、そして消極的にならず前向きであること、という酪農家の三つの心情が牛の乳量向上と相関関係を持つことが示されています。また牛の行動学を専門とするオルブライト博士は「牛を適切に扱うに理想的な人間の性格とは、社交的よりもむしろ内向的な性格である」と表現し、酪農に適した人間の性格についての心理的分析が研究されています。

「牛は本質的に人間が怖い」とも言われる上で、牛の感じる不安と生産性との関係が次第に明らかとなり、人間の乳牛への接し方が最近にわかに強調されるようになりましたが、前出のグラント博士は、その重要性を一世紀以上も前に説いたビル・ホード(雑誌「ホーズ・デーリイマン」創刊者)の次の言葉を挙げて紹介しています。「牛に対して人間は我慢強くあること、それが牛舎での不変のルールである・・・」近年は農場の規模拡大が進み、人間と牛とが触れ合う機会は搾乳時くらいに限られるようになりました。両者の関係が密であるべきか、あるいは疎遠でも構わないのかは論議の分かれる課題ですが、いずれにせよ人間の存在が、牛の不安やストレスの原因であってはならないのは確かなことなのです。